

インフォメーションリテラシー教育からインテリジェンスリテラシー教育へ

石川 幹人

明治大学情報科学センター、明治大学文学部 助教授

〒101-8301 明治大学研究棟 1039 号 E-mail:ishikawa@kisc.meiji.ac.jp

1. 大学における基礎的情報教育の枠組み

人間の知的活動を高度化させることを目的に情報機器や情報環境を活用しようという観点から、いわゆるインフォメーションリテラシー教育の体系が検討されてきている。

私情協では『1997 年版 情報基礎教育モデルシラバス』で、すでに以下の基本枠組みを提案している[1]。

インターネットコミュニケーション

- ネットワーク
- 情報倫理
- コミュニケーション環境の構築法

インタラクティブコミュニケーション

- マスコミュニケーションの特性
- インタラクティブコミュニケーションの特性
- 社会システム・文化論

コンピューティング

- 問題発見・構成
- モデル化
- シミュレーション
- コンピューティング環境の構築法

プレゼンテーション

- シナリオ作成
- マルチメディア表現法
- 発表
- プレゼンテーション環境構築法

2. 明治大学における基礎的情報教育

昨年の本フォーラムで報告されたように[2]、明治大学では 1998 年度より、上記の私情協モデルシラバスに基づいた基礎的情報教育を実施している。それは、1,2 年配当の情報基礎論 2 科目に対し、インフォメーションリテラシーに重きを置いたシラバス構築を行う[3]ことで実現されている。

情報基礎論では、私情協モデルシラバスの枠組みを次のように割り当てている。

情報基礎論 I (半期 2 単位)

- インターネットコミュニケーション
- インタラクティブコミュニケーション

情報基礎論 II (半期 2 単位)

- コンピューティング
- プレゼンテーション

これらの科目は、インターネット接続された 1 人 1 台のパソコンを操作しながらの授業形態となっており、各科目の履修者は約 5 千名(120 コマ、教員 40 名、実験助手補 120 名)となっている。

また、2000 年度入学者から課される、教員免許状取得に伴う、情報科目の 2 単位必修化についても、この情報基礎論 I を中心に対応していく予定である。

なお、コンピュータリテラシーが十分でない学生は、インフォメーションリテラシーを学ぶ中で自習を行わねばならない。なぜなら、授業のなか

で、電子メール、ホームページの掲示板などが使われており、コンピュータリテラシーが十分でなければ、単位が取れないからである。

自習のためには、パソコンを設置した自習室を開室するとともに、ノートパソコンが接続可能な、約 9000 個所の情報コンセント（駿河台校舎）を設けている。

自習のきっかけを与える意味合いで、次の講習会（単位の対象ではない）を開講している。これらの講習会の講師には、実験助手補があたっている。

- 電子メールのつかいかた
- ワードソフトの基本操作
- 表計算ソフトの基本操作
- プログラミング環境の基本操作
- ホームページのつくりかた
- ワークステーション基本操作
- メインフレームの基本操作

教材についても、ホームページに集約して活用をはかる計画を推進する一方で、現在、基礎的情報教育に沿ったテキスト「文科系のための情報学シリーズ」（培風館）を明治大学情報科学センターで編集し、順次発行している。本年度分の全 8 巻は、以下のような構成となっている。

- 使いこなそうコンピュータ
- 道具としてのインターネット
- インターネットコミュニケーション
- 人間と情報
- プレゼンテーションの実際
- 時系列データの解析
- Visual Basic を使ったシミュレーション
- シスアド資格に挑戦

3. 基礎的情報教育の展望

2003 年より、高等学校に情報（「情報 A」「情報 B」「情報 C」）の授業が導入されるが、それらの内容[4]は、私情協モデルシラバスとも類似点が多く、インフォメーションリテラシー教育を目標したものであると言えよう。

情報科目を高校で履修した学生が大学に入学してくる 2006 年からは、インフォメーションリテラシーをすでに身につけた学生の割合が、ある程度まで増えてくると予想される。そうした状況の基礎的情報教育は、高校のインフォメーションリテラシー教育の、単なる繰返しであってはならない。

大学にあっては、従来に加えて、インテリジェントリテラシー[5]と呼べるような、高度な情報教育への展開が必要であろう。そのための準備を今から始めておくべきと思われる。

インテリジェントリテラシーとは何かは、これから議論を積み重ねていくものではあるが、次のような概念が議論のヒントとなる。

- 情報環境を活用した独自の研究活動
- 情報が主体的な関与で成立すること
- 情報社会における人間観の変容

筆者は、こうした概念の一部について、現在、「人間と情報」という講義科目のなかで、その教育内容を具体化する試みを行っている[6]。

参考文献

- [1] 情報教育研究委員会専門分科会：『1997 年版情報基礎教育のモデルシラバス』（社）私立大学情報教育協会、pp.91-92(1996)
- [2] 阪井和男：文系における情報活用型の基礎的情報教育の試み、『平成 10 年度情報教育問題フォーラム資料』、（社）私立大学情報教育協会、pp.58-61(1996)
- [3] 明治大学情報科学センター：1999 年度情報関係科目シラバス
- [4] 文部省：高等学校学習指導要領、第 10 節情報、pp.142-148(1999)
- [5] 阪井和男：情報活用型の基礎的情報教育の実践、明治大学情報科学センター年報、第 10 号、pp.23-34(1998)
- [6] 石川幹人：『人間と情報 ~ 情報社会を生き抜くために ~ 』、文科系のための情報学シリーズ、明治大学情報科学センター編、培風館(1999)